

国際交流事後活動ニュース(特別号)

# MACROCOSM

マクロコズム



## Contents

- 平成19年度内閣府青年国際交流事業参加青年募集特集 ②
- 平成18年度  
「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業 ①6
- ターニングポイント ②1
- 第4回「青年の船」同窓会 ②5
- 国際交流リーダー養成セミナー参加者募集 ②6
- お知らせ ②8

2007.1 VOL.74

(財)青少年国際交流推進センター

## 平成19年度内閣府青年国際交流事業

内閣府青年国際交流事業の素晴らしさを周りの人に、そして広く社会に伝えましょう!

### 〈何を掴むかはあなた次第!〉

事業に参加して、将来の糧となるものを掴み、自分のフィールドで、次代の我が国を担いたいという前向きで積極的な気持ちを持っている青年を待っています。

内閣府は、参加青年が身に付けるものとして次の点を重視しています。

- 国際社会で通用する考え方
- 諸外国に対する視野、日本に対する視野、社会の多様性に対する視野
- 団体を動かす能力、団体を活かす能力
- 国を代表する経験

また、事業に参加した青年は、その経験を活かして、一人一人が、国会議員や企業経営者、大学教員、国際機関職員など社会の様々な分野で活躍するとともに、各国で団体を組織し、そのネットワークを活かした国際交流活動や青少年育成活動などを展開しています。

このネットワークに参加すれば、活動するフィールドは限りなく広がります。

- 全世界に広がる約3万人のネットワーク

### 〈内閣府青年国際交流事業一覧〉

事業名	事業概要	
航空機による青年海外派遣	国際青年育成交流	世界各国・地域に航空機で派遣され、訪問国において、現地青年との交流・意見交換、国際協力活動の現場の視察・体験、日本青年代表としての表敬訪問、ホームステイなどを行います。
	日本・中国青年親善交流	航空機で中国に派遣され、中国青年との交流・意見交換、社会状況等理解のための各種施設の訪問、日本青年代表としての表敬訪問、ホームステイなどを行います。
	日本・韓国青年親善交流	航空機で韓国に派遣され、韓国青年との交流・意見交換、社会状況等理解のための各種施設の訪問、日本青年代表としての表敬訪問、ホームステイなどを行います。
船による多国間交流	世界青年の船	日本青年約120名と外国青年約140名が、船内で共同生活をしながら、3か国程度を訪問します。事業では、国際社会で通用する考え方やコミュニケーション能力を身に付けることを目的としたディスカッションや、社会活動を行う上で必要な団体・事業運営能力の向上を図るための国籍混交グループによる共同自主活動やクラブ活動、国際社会の多様性や異文化に対する理解の促進を図ることを目的とした各国文化紹介などを行います。
	東南アジア青年の船	日本青年約40名とASEAN10か国の青年約300名が、船内で共同生活をしながら、ASEAN加盟国のうち5か国程度と日本を訪問します。船内では、ディスカッション、共同自主活動やクラブ活動、各国文化紹介を中心とした活動を行い、訪問したASEAN各国と日本においては、地元青年との交流や課題別視察、そして全ての国で2泊3日のホームステイを行います。

<http://www.cao.go.jp/koryu/>



## 日本参加青年募集概要

	航空機による青年海外派遣			世界青年の船	東南アジア青年の船
	国際青年育成交流	日本・中国青年親善交流	日本・韓国青年親善交流		
訪問国	バルト三国、カンボジア、メキシコ、ミャンマー、ヨルダン(うち1か国・地域を訪問)	中国	韓国	世界各国の青年140名と共に船内で共同生活をしながらインド、中近東方面を訪問	ASEAN10か国の青年300名と共に船内で共同生活をしながら、ASEAN5か国と日本を訪問
実施時期(期間)	平成19年9月20日間程度	平成19年9月20日間程度	平成19年9月15日間程度	平成20年1月～3月40日間程度	平成19年10月～12月50日間程度
募集人員	各12名程度(合計60名程度)	一般団員：25名程度 渉外団員：2名程度		120名程度	40名程度
応募要件	国籍	日本国籍を有すること			
	年齢(注)	18歳～30歳	一般団員：18歳～30歳 渉外団員：おおむね25歳～35歳	18歳～30歳	18歳～30歳
	事後活動	帰国後、事業での経験を活かして、青少年育成活動や国際交流活動などの社会貢献活動を積極的に行うことが期待できること			
	教養	我が国や訪問国に関する一般的な教養を有すること			
	語学力	訪問国における活動を円滑に行う英語力	一般団員：訪問国の公用語により簡単な日常会話ができる者が望ましい。 渉外団員：訪問国の公用語で通訳を円滑に遂行することができること。		訪問国における活動を円滑に行う英語力
	その他	国が行う同種の事業に参加したことがある者は応募できません(ただし、渉外団員への応募はこの限りではない)。			
研修	事前	7月上旬の約1週間		9月中旬の約1週間	8月上旬の約1週間
	出発前	出発直前の2日間		出航直前の5日間	出航前の4日間
	帰国後	帰国直後の2日間		—	帰国直後の2日間
個人負担額	約8～10万円			約18～20万円	
	内訳：研修費(事前、出発前、帰国後、船内供食費(船事業のみ)、渡航手続費用など ※上京・帰京旅費等は別途負担になります。				
応募先	各都道府県の青少年対策主管課(室)(※P.4の一覧参照)及び全国的な組織を持つ青少年団体				
選考の流れ	○中間選考(応募先である都道府県又は青少年団体が実施)：3月末～4月中旬(都道府県等により実施方法、内容が異なる)				
	○第2次選考(内閣府が実施)：5月(人物面接、一般教養、英会話(日中・日韓交流を除く)の各試験を実施)				
	○最終選考(事前研修を兼ねて内閣府が実施)：上記のとおり				

(注)年齢は全て平成19年4月1日現在

なお、訪問国及び日程は、諸事情により変更になることがあります。最新の情報は内閣府ホームページで確認してください。

## 4 平成19年度内閣府青年国際交流事業参加青年募集特集

### 平成19年度内閣府青年国際交流事業各都道府県連絡先一覧

	都道府県	主管課等名	電話番号	(内線)	募集期間	中間選考日
1	北海道	知事政策部知事室国際課	011-231-4111	(21-224)	2月1日～3月23日	4月2日～4月13日
2	青森県	環境生活部青少年・男女共同参画課	017-734-9224	*	2月1日～3月16日	4月14日～
3	岩手県	環境生活部青少年・男女共同参画課	019-629-5348	*	2月1日～3月25日	4月13日～
4	宮城県	環境生活部青少年課	022-211-2558	*	2月1日～3月31日	4月13日～
5	秋田県	生活環境文化部県民文化政策課	018-860-1553	*	2月20日～3月20日	4月14日
6	山形県	文化環境部女性青少年政策室	023-630-2727	*	2月13日～3月30日	4月14日～
7	福島県	生活環境部県民環境総務領域	024-521-7187	*	2月13日～3月23日	4月7日～
8	茨城県	知事公室女性青少年課	029-301-2183	*	2月13日～3月30日	4月14日又は4月15日
9	栃木県	生活環境部女性青少年課	028-623-3075	*	2月1日～3月30日	4月11日～
10	群馬県	健康福祉局青少年こども課	027-226-2628	*	3月1日～4月6日	書類選考
11	埼玉県	総務部青少年課	048-830-2905	*	2月1日～3月30日	4月5日～4月8日
12	千葉県	環境生活部県民生活課	043-223-2330	*	2月5日～3月23日	4月12日～
13	東京都	教育庁生涯学習スポーツ部社会教育課	03-5320-6859	*	2月7日～3月16日	書類選考
14	神奈川県	県民部青少年課	045-210-3844	*	2月13日～3月20日	4月8日～
15	新潟県	福祉保健部児童家庭課	025-280-5214	*	2月5日～3月23日	4月12日～
16	富山県	厚生部児童青年家庭課	076-444-3136	*	2月26日～3月30日	4月15日～
17	石川県	観光交流局国際交流課	076-225-1381	*	2月1日～3月23日	4月7日
18	福井県	教育庁青少年育成課	0776-20-0296	*	2月14日～4月5日	4月6日～4月15日
19	山梨県	企画部県民室青少年課	055-223-1357	*	2月1日～3月16日	3月25日～
20	長野県	教育委員会事務局文化財・生涯学習課	026-235-7439	*	3月1日～3月31日	書類選考
21	岐阜県	環境生活部男女参画青少年課	058-272-1111	(2426)	2月8日～3月23日	4月12日～
22	静岡県	教育委員会事務局青少年課	054-221-3704	*	2月1日～3月20日	4月7日～
23	愛知県	県民生活部社会活動推進課	052-954-6175	*	2月1日～3月20日	書類選考
24	三重県	生活部青少年・私学室	059-224-2404	*	2月5日～3月20日	4月8日
25	滋賀県	政策調整部青少年室	077-528-4661	*	2月1日～3月30日	4月15日～
26	京都府	府民労働部青少年課	075-414-4301	*	2月13日～3月23日	4月10日～
27	大阪府	生活文化部次世代育成支援室	06-6941-7679	*	2月1日～3月23日	4月6日～
28	兵庫県	県民政策部県民文化局青少年課	078-362-3143	*	2月1日～3月23日	4月7日～
		(財)兵庫県青少年本部事業推進部	078-360-8581	*		
29	奈良県	福祉部こども家庭局青少年課	0742-27-8608	*	2月1日～3月30日	書類選考
30	和歌山県	環境生活部共生推進局青少年課	073-441-2504	*	2月13日～3月27日	4月7日
31	鳥取県	文化観光局交流推進課	0857-26-7030	*	2月1日～3月16日	書類選考
32	島根県	環境生活部文化国際課	0852-22-5020	*	2月9日～3月30日	4月14日～
33	岡山県	生活環境部青少年課	086-226-0557	*	2月10日～3月31日	書類選考
34	広島県	県民生活部青少年・地域安全室	082-228-9335	*	2月5日～3月30日	4月11日～
35	山口県	地域振興部国際課	083-933-2343	*	2月13日～3月23日	4月13日～
36	徳島県	県民環境部県民環境政策課青少年くらし安全室	088-621-2204	*	2月5日～3月30日	4月15日～
37	香川県	総務部青少年・男女共同参画課	087-832-3195	*	3月1日～4月4日	4月15日～
38	愛媛県	県民環境部県民協働局県民活動推進課	089-912-2415	*	2月13日～3月31日	4月13日～
39	高知県	文化環境部国際交流課	088-823-9605	*	2月1日～3月30日	4月6日～
40	福岡県	生活労働部青少年課	092-643-3386	*	2月13日～3月23日	4月15日～
41	佐賀県	くらし環境本部こども課	0952-25-7382	*	3月1日～3月31日	4月8日～
42	長崎県	教育庁生涯学習課	095-894-3365	*	2月13日～4月2日	4月12日
43	熊本県	環境生活部交通安全・青少年課	096-333-2294	*	3月1日～3月23日	4月1日～4月10日
44	大分県	生活環境部私学振興・青少年課	097-536-1111	(3076)	2月15日～3月30日	4月14日～
45	宮崎県	地域生活部青少年男女参画課	0985-26-7041	*	2月5日～3月30日	4月13日～
46	鹿児島県	環境生活部青少年男女共同参画課	099-286-2557	*	2月1日～3月31日	4月14日～
47	沖縄県	福祉保健部青少年・児童家庭課	098-866-2174	*	2月1日～3月30日	4月11日～4月17日

※募集の期間及び中間選考日は予定です。(詳しくは各都道府県庁の青少年主管課(室)までお問い合わせください。)

## 国際青年育成交流事業討議セッション(第5回)募集概要

## I 概要

## 1 目的

国際青年育成交流事業(外国青年招へい)のプログラムの一環として、世界10か国から招へいた外国青年と、国際的な問題に関心の深い日本青年とが、分野ごとのコースに分かれて率直な意見交換を行うことにより、それぞれの分野について、日本独自の考え方、あるいは、全世界で通用する考え方がどのようなものかという認識を深め、国際的対応力を身につけることを目的とする。

## 2 事業の概要

## (1)開催期間

平成19年7月15日(日)から7月19日(木)までの5日間

## (2)会場

国立オリンピック記念青少年総合センター  
(東京都渋谷区代々木神園町3-1)

## (3)参加者

## ア 日本青年

約60名(内閣府が応募者の中から選考)

## イ 外国青年

約100名(「国際青年育成交流」事業(招へい)に参加している10か国の青年)

## (4)プログラム内容

テーマ別に分かれたコースごとのディスカッションを中心として、それぞれの分野の知識を深めるとともに、異文化を理解する。同時に、プログラムを通してディスカッションの進め方やコミュニケーションの技術、発表方法などを身に付ける。

	日程
7月15日(日)	日本参加青年オリエンテーション、ディスカッション講座、ディスカッション準備
7月16日(月)	外国青年との交流会、コース別ディスカッション
7月17日(火)	コース別活動
7月18日(水)	コース別ディスカッション、発表会準備
7月19日(木)	発表会、修了式

## (5)テーマ

- ①企業の社会貢献    ②教育    ③環境  
④情報    ⑤伝統文化    ⑥ボランティア

## 3 経費

- (1)事業中の宿泊料、食費、移動費などの経費は内閣府が負担する。  
(2)事業に参加するための会場までの交通費は、参加青年本人の負担とする。

## II 募集について

## 1 応募資格

- (1)年齢 20歳～35歳程度  
(2)心身の状況 心身が健康で協調性に富み、開催国参加青年としての自覚を持って円滑なプログラム運営に協力できること  
(3)知識及び経験 選択したテーマについて、討議可能な知識、経験を有する者  
(4)語学力 ディスカッション可能な英語力を有する者  
(5)事業全日程への参加 5日間の全日程に参加できる者  
※平成19年度に内閣府が実施する他の青年国際交流事業に参加申込みをした者は応募可能。

## 2 欠格事由

内閣府の行う青年国際交流事業に参加したことがある者は応募できない。

## 3 募集人員 60名

## 4 共通言語 英語

## 5 募集方法

## (1)提出書類

ア 参加申込書 1編  
内閣府のホームページからダウンロード可能。  
<http://www.cao.go.jp/koryu/>

## イ 作文 2編

- a 英作文 志望動機(600～800語)  
b 和作文 選択したテーマに関して最も注目していることについての自分の意見・考え(1200字以内)  
※書式は、いずれも縦A4判横書きとし、題名及び氏名を明記すること。  
パソコン、ワープロによる作成を推奨する。  
※題名及び氏名は字数に含まない。

## (2)提出先及び提出方法

〒100-8970 東京都千代田区霞が関3-1-1  
中央合同庁舎第4号館  
TEL(03)3581-1181(直通) FAX(03)3581-1609  
内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付国際交流第1担当へ郵送で提出する。

## (3)締切り 平成19年5月31日(木)消印有効

## (4)その他 提出書類は返却しない。

※参加が決定した場合は、情報交換のため、事務局が設定するメーリングリストに登録します。また、それに伴い、氏名を他の参加者に公開します。その他の情報については、必要に応じて、了解をいただいた上で公開します。

## 6 決定通知

選考の結果は、平成19年6月中旬に内閣府から本人に直接通知する。

## 「国際青年育成交流」事業

### International Youth Development Exchange Program (INDEX)

皇太子殿下の御成婚を記念して平成6年度から開始された本事業は、今回で13回目を迎え、本年は8月31日～9月20日、バルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）、カンボジア、ドミニカ共和国、ミャンマー、チュニジアの5か国に派遣されました。各団は、団長、副団長、団員12名の合計14名で構成され、それぞれの訪問国で表敬訪問、施設見学、現地青年との交流、ホームステイなど、様々な活動に参加しました。

#### ミャンマー



ミャンマーの「国際青年育成交流」事業および「東南アジア青年の船」事業参加青年との懇談



ヤンゴンでのホームステイ



ニャウンウーでのホームステイでホストファミリーと共に

#### チュニジア



ジャスミンにて日本・チュニジア友好記念植樹



ケルケナ島の小学校での折り紙交流



ホームステイ先での晚餐

バルト三国

平成18年度「国際青年育成交流」事業  
バルト三国派遣団参加青年 伊藤 朋子



リトアニアのホストファミリーと記念撮影

世界史を学んでいても、想像しがたいエキゾチックなバルト三国。日本にいてもなかなか名前を聞くことがない国々なので、派遣以前はこれらの国のことをほとんど知りませんでした。

IT先進国であるエストニア、ロシアとの移民や国境問題を抱えるラトビア、そして杉原千畝館のあるリトアニア。派遣時には、現実のバルト三国の姿に感銘をうけ、疑問をもちました。

そんな時に現地の青年や派遣団員と議論できたことが今でも一番の思い出です。話し合いの機会を通して、私はバルト三国について多くを学ぶことができました。異なる国籍、文化、言語、そして経験を持った

青年の私たちが話し合いをして、自由に意見をぶつけ合い、悩み、そして最終的には意識の共有ができたことが非常に貴重な体験だったと思います。話し合いの終わりにはいつも何か達成感のようなものを感じていましたし、議論を交わすたびにお互いの間に強い仲間意識が生まれてくるのがわかりました。

今日では「対話」を行うことが国際関係の中でも重要視されています。互いに異なった背景や関心を持っているからこそ、このグローバル化していく世界の中でどうやって協調し共存していくかが命題となっていますが、派遣団員としてバルト三国へ行き、話し合いの重要性をより一層、認識しました。

話し合うことで理解しあい、そして強い絆が生まれる。これこそ国際交流の真髄なのだと思います。



ラトビアのリエバーヤにある孤児院で日本文化の紹介をする

月日	主な日程
8月31日	出発
9月2日	エストニア タリン着
9月4日	Kloogaranna Youth Campにて現地青年と交流
9月5日	在エストニア共和国日本大使館表敬訪問
9月6日	教育研究省見学
9月7日	バスにてラトビアのリガへ移動
9月8日	在ラトビア共和国日本大使館表敬訪問
9月9日	ラトビア青少年協会訪問
9月10日	ストックホルム商科大学リガ校にてグローバル・デーに参加
9月12日	リエバーヤ青少年施設にて意見交換
9月13日	ラトビアからリトアニアへ向けて出発
9月14日	在リトアニア共和国日本大使館表敬訪問
9月16日	杉原千畝館見学、ホームステイ(17日まで)
9月20日	帰国



エストニア青少年協会にて意見交換を行う

カンボジア

「人の繋がり、国の繋がり」

平成18年度「国際青年育成交流」事業  
カンボジア派遣団参加青年 平山 雄大

本事業でカンボジアを訪れたあの3週間は、今思い出しても涙が出そうになるくらい、すてきな出会いに恵まれた心に残る日々だった。同年代の青年と丸一日を費やして実施したワークショップ、訪問先の諸機関で行った数々の文化交流、ホームステイ中の日々…、そのどれもが、出会いなしには語ることができない。



「東南アジア青年の船」事業、「国際青年育成交流」事業既参加青年とのワークショップ

国際協力の世界で働いておられる方々との出会いもまた、新たな問題を考えるきっかけを与えてくれた。

総じて、毎日が驚きと発見の連続であり、カンボジアをより深く、より身近に感じることができるようになった。全国から集まった興味関心の異なる仲間が、多種多様な視点からそれを捉え、お互いが意見を共有することによって、視野が何倍にも広がったように思う。団長、副団長はもちろんのこと、終始行動を共にした仲間の存在は、何にもまして大きかった。

国際交流や国際協力に限らず、生きるうえで大切なものは、突き詰めれば、それは出会いをもとにした人と人との繋がりなのではないだろうか。生涯にわたって付き合い、連絡の取り合える関係の構築を目指して——。これからも、長くカンボジアに関わり続けながら、「繋がり」を大切にしていきたい。

月 日	主な日程
8月31日	出発
9月 1日	教育省表敬訪問、王立プノンベン大学の学生と交流
9月 3日	「東南アジア青年の船」事業、「国際青年育成交流」事業既参加青年とのワークショップ
9月 5日	国際NGO活動現場視察、孤児院の子どもたちと交流 在カンボジア日本大使館、JICAプノンベン事務所表敬訪問
9月 6日	青年海外協力隊活動現場（職業訓練センター）訪問
9月 7日	国立経営大学の学生と交流、現地NGO訪問
9月8~10日	ホームステイ
9月11日	シェムリアップ州知事表敬訪問
9月12日	日本国政府アンコール遺跡救済チーム・遺跡修復活動現場視察 上智大学アンコール遺跡国際調査団・遺跡修復活動現場視察
9月13日	地元高校の学生と交流
9月14日	クメール伝統織物研究所訪問
9月15日	国際機関、日本大使館、JICA、NGO等の日本人職員及び青年海外協力隊員との懇談
9月18日	現地NGO地雷処理活動現場視察、教育省主催のフェアウェルパーティ
9月19日	プノンベン発
9月20日	帰国



プノンベン郊外のお寺で高僧と会話する青年



カンボジア青年と伝統楽器トローを演奏する筆者（左端）



ドミニカ共和国

「国境」

平成18年度「国際青年育成交流」事業  
ドミニカ共和国派遣団参加青年 吉村 祐一

ドミニカ共和国はカリブ海のエスパニョール島に位置する日本と同じ島国であります。一面に広がる海は美しく、出会う人々は陽気できさくな方ばかりでした。今でも目を閉じ、耳を澄ますと、ドミニカ共和国の情景がはっきりと浮かんできます。私たちがまで幸せにしてくれるすてきな笑顔、一日中鳴り止まない音楽、ダンス。一言ではとても語り尽くせませんが、情熱・笑顔・躍動感、このような言葉がぴったりの国です。

「国境なき友情」。これは、今年度ドミニカ共和国団のスローガンですが、派遣期間中、この言葉を実現すべく国境・世代を越えて多くの友情を築きあげました。同時に、まだまだ、日本が十分に理解されておらず、また、誤解している人々の多さにも驚き、中米とアジアの「遠さ」を痛感しました。

派遣中は大使館、日本人移住者、JICA職員、NGO、ボランティアの方々といった現地で活躍される日本人と話す機会にも恵まれました。様々なレベルで両国の交流・相互理解を促進している現場を目の当たりにして、自分自身の視野がより広がりました。彼らは文字通り、「国境」を越えて活躍しており、この流れが様々な国々に広がることで、いつの日にか、国境を意識することなく互いの価値観を認めあう社会が実現できるのではないでしょうか。今回の派遣を通して「持続的な対話」の重要性を感じました。



外交官学校にて



小学校にて日本の歌の合唱を披露する



バーベキューを食べながら現地青年と語り合う

月 日	主な日程
8月31日	出発
9月1日	サントドミンゴ到着
9月4日	ダハボン市に飛行機で移動、ハイチ国境見学・日系社会との交流会
9月6日	サンティアゴに到着、市長・青年省表敬
9月7日	JICA算数プロジェクト見学・コーヒー農園訪問
9月9日	テレビ出演
9月9~10日	ホームステイ
9月11日	副大統領表敬
9月12日	日本NGO "eco-eco-world" 訪問
9月13日	アイバール保健衛生都市訪問
9月14日	外交官学校訪問・APEC大学日本語クラス見学
9月17日	広島東洋アカデミー訪問
9月20日	帰国

## 「日本・中国青年親善交流」事業

平成18年度「日本・中国青年親善交流」事業(第28回)参加青年  
村岡 健

### 中国で見つけた喜び

私は派遣期間中、写真係として記録写真を毎日撮り続けてきた。そこでの写真は、この日中交流の本質を鮮明に表していた。

私たちは、この派遣期間中に様々な場所を訪れ、そして多くの人々と出会った。最初は私たちも中国青年もぎこちない表情を浮かべている。しかし、ある者は中国語で語り合い、またある者は身振り手振りで一生懸命コミュニケーションをとっていくうちに、自然な笑顔が表情に表れてくる。いつしか私のカメラは、笑顔の写真で一杯になっていった。みんな純粋にこの出会いを喜んでいるように見えた。

そもそも私はこの事業に参加するまでは、国際交流に高い敷居のようなものを感じていた。それは、まず言語でのコミュニケーションができなければ国際交流はできないと考えていたからだ。しかし、実際に中国を訪れて、大事なものは言語なのではないということに気付かされた。大事なものはお互いを理解しようとする姿勢である。

私は中国語が話せない代わりに、中学生レベルの英語と筆談でコミュニケーションを試みていた。確かに自分の思いがなかなか伝わらないもどかしさを感じることはあったが、自分の思いを相手が理解してくれた時には、ある種の感動さえ覚えた。私はその喜びを知ることによって国際交流への第一歩を踏み出すことができた。今後はその喜びを多くの人が味わえるようにこの事業を広めていくと共に、私も更なる喜びを得るための活動を行っていきたいと思う。



中日青年友好交流50周年記念フォーラムで錢太鼓を披露



広西民族大学にて現地学生と交流



ホストファミリーと「朋友」を合唱

月日	訪問都市	主な日程
9月2日		出発
9月2~6日	北京	中日青年友好交流50周年記念フォーラム参加 表敬訪問(中華全国青年連合会、人民大会堂、在中国日本大使館等)
9月6~10日	南寧	広西チワン族自治区政府表敬訪問 日中青年交流合宿セミナー参加
9月10~14日	アモイ	アモイ大学訪問(現地学生との交流会)
9月14~18日	泉州	泉州市政府表敬訪問 ホームステイ(2泊3日)
9月18~20日	上海	市内視察プログラム(同済大学学生が同行)
9月20日		帰国

## 「日本・韓国青年親善交流」事業

平成18年度「日本・韓国青年親善交流」事業(第20回)参加青年

野口 知美

### 一期一会 ～未来へ～

15日間韓国で過ごしたことを一生忘れないと思います。日本全国から集まった29人の仲間たちと共に笑い、共に泣き、多くのことを一緒に学び、成長できました。

韓国で出会った今年度派遣青年「kakehashi」メンバーとの海を越えた友情の絆は、私にとって大切な宝物です。私たちの出会いは「一期一会」ではなく、「架け橋」となり、大きな一つの輪ができました。どんなに離れていても時間が経っても、私たちの心は一つにつながっています。今回の派遣活動で、さらに韓国との友好を深め、両国との架け橋になりたいと思いました。

世代を越えた多くの方が韓国に興味を持つようになっていきます。私たち民間人が交流を活発に行い、お互いに良い感情を持ち続ければ、歴史の壁を越え政治もいつか変わるはずです。

今回の親善交流事業で両国の友好協力を促進し、協同する心を持たせたいと思います。これらで得たものを将来にいかせるように、この交流の経験をできるだけ多くの人に伝えられるような仕事をしたいと思いました。両国のすばらしさを未来につなげていきたいです。

私たちは韓国派遣団のTシャツの胸に「우리는 앞으로도 일한교류에 있어서의 다리역할을 하고 싶습니다。」(「私たちはこれからも日韓交流の架け橋になりたいです」)と書きました。この思いを胸に、今回の派遣を始まりの一步として、日韓友好のために最善をつくしていきたいと思っています。



韓国最後の夜、日韓青年と

月 日	主な日程
9月6日	出発
9月7日	駐韓日本大使館表敬訪問、青少年委員会表敬訪問、国立中央博物館、ジョンソン劇場伝統芸術舞台観覧
9月8日	国立国学院訪問、三星文化館、昌徳宮、NANTA観覧
9月9日	統一展望台、トラサン駅、国立平昌青少年修練院～11日まで、11日から慶州へ移動
9月12日	石窟庵、仏国寺、慶州皇南里古墳群(新羅味羅王陵、皇南貝塚、天馬塚)、慶州瞻星台、慶州国立博物館
9月13日	平沙里、大韓茶園、光州に移動
9月14日	華嚴寺でお寺体験
9月15日	光州国立5.18民主墓地、光州ビエンナーレ、全南大学、17日までホームステイ
9月17日	全州ビビンバ作り、ソウルへ移動
9月18日	韓国青少年協議訪問、討論会、ソウル中区青少年修練院館で交流
9月19日	三星水原広報館、韓国調理科学高校でクジールパン作り体験、歡送会
9月20日	帰国



日韓合同運動会での選手宣誓



日韓合同運動会赤チーム(筆者中央)

## 第33回「東南アジア青年の船」事業

### The 33rd Ship for Southeast Asian Youth Program

「東南アジア青年の船」事業は、昭和49年のインドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール及びタイ各国と日本との首脳会談による共同声明に基づき、アセアン諸国と我が国による青年国際交流の共同事業として発足したものです。昭和60年度からはブルネイ・ダルサラーム、平成8年度からはベトナム、平成10年度からはラオス、ミャンマー、平成12年度からはカンボジアを加え、これらアセアン諸国の協力のもと、日本政府が実施しています。

第33回を迎えた今回は、10月23日に日本を出航し、シンガポールでアセアン各国が参集して乗船した後、アセアン5か国に寄港し、最後に日本で活動を行い12月12日に終了しました。

#### 事業内容

- (1) 船上活動  
日本及び東南アジア諸国の各国事情の紹介、討論、クラブ活動、グループ活動など
- (2) 訪問国活動  
訪問国の青年との文化の紹介、スポーツ、奉仕活動、ホームステイ、施設見学など

#### 参加国

ブルネイ・ダルサラーム国、カンボジア王国、インドネシア共和国、ラオス人民民主共和国、マレーシア、ミャンマー連邦、フィリピン共和国、シンガポール共和国、タイ王国、ベトナム社会主義共和国及び日本

#### 構成

- (1) 管理官1人、副管理官1人、管理部員27人、ファシリテーター8人
- (2) ナショナル・リーダー11人(各国から1人)、日本参加青年38人、外国参加青年276人

#### 日程

- (1) 事前研修(日本参加青年) : 7月30日～8月4日
- (2) ファシリテーター会議 : 8月9日～12日
- (3) ナショナル・リーダー会議 : 9月12日～15日
- (4) 出航前研修(日本参加青年) : 10月21日～10月22日
- (5) 参集式(シンガポール) : 10月31日
- (6) 運航 : 10月23日～12月4日
- (7) 日本国内活動 : 12月4日～12日

#### 航路及び寄港地

横浜(日本)	10/23
↓	
シンガポール	10/30～11/4
↓	
ジャカルタ(インドネシア)	11/6～11/9
↓	
ポートクラン(マレーシア)	11/12～11/15
↓	
ムアラ(ブルネイ)	11/19～11/22
↓	
マニラ(フィリピン)	11/25～11/28
↓	
東京(日本)	12/4

(シンガポール寄港中、代表団が航空機でヤンゴン(ミャンマー)を訪問(11/1～11/2))



航路概略図



参集式であいさつする谷本龍哉内閣府大臣政務官  
(10月31日シンガポール・パンパシフィックホテル)



全参加青年で制作した  
「Fabric of SSEAYP」  
(11月1日)



シンガポールにおけるコミュニティーサービスで、高齢者の施設を訪問する(11月2日)



SG(ソリダリティー・グループ)活動におけるSG対抗  
綱引き大会(11月5日)



ディスカッションテーマ別課題別視察でマレーシア青年スポーツ省を訪問し地元の学生と  
青少年育成活動について意見交換をする(青少年育成グループ)(11月13日マレーシア)



インドネシアの出港式で参加青年代表のあいさつをするブルネイの  
ユース・リーダー(11月9日)



マレーシア参加青年による文化紹介(11月11日)

## 第19回「世界青年の船」事業

### The 19th Ship for World Youth Program

「世界青年の船」事業は、日本参加青年約120名と世界13か国からの外国青年約140名が、約1か月半の間にわたり「世界青年の船」に乗船し、生活を共にする中、各種の交流活動を行う事業です。船内においては「青年の社会参加」を共通テーマとしたコース・ディスカッションや各国の紹介、クラブ活動など各種の多国間交流を行うとともに各訪問国においては政府要人への表敬訪問、現地青年との交流活動、コース・ディスカッションのテーマ毎の課題別視察等の活動を行います。

(\*写真は全て第18回「世界青年の船」事業のもので)

#### 構成

- (1) 管理官1人、副管理官1人、主任1人、管理部員約25人
- (2) 指導官約8人
- (3) 日本参加青年約120人、外国参加青年約140人

#### スケジュール

国内プログラム	
1月16日	外国参加青年来日
1月16日~24日	国内活動 出航前研修(日本参加青年は1月20日から)
運航	
1月25日	出航 横浜(日本)
2月5日~2月8日	ブリスベン(オーストラリア)
2月12日~2月14日	シドニー(オーストラリア)
2月19日~2月21日	ウェリントン(ニュージーランド)
2月25日~2月26日	ポートビラ(バヌアツ)
3月8日	帰港 東京(日本)



APDKボンボルル・ワークショップで障害者による工芸品制作の現場を見学(ケニア(モンバサ)にて)



ラジブ・ガンディー国立青年施設訪問におけるコース別の講義(青少年育成コース)(インド(チェンナイ)にて)



#### 参加国

オーストラリア連邦、カナダ、チリ共和国、エジプト・アラブ共和国、フィジー諸島共和国、日本国、メキシコ合衆国、オマーン国、ロシア連邦、セーシェル共和国、ソロモン諸島、トンガ王国、英国、イエメン共和国



ケニアのHIVエイズ対策について話し合う  
(コース・ディスカッション/ボランティアコース)



「国際協力はなぜ必要か」という討議の成果発表  
(コース・ディスカッション/教育コース)



ナショナル・プレゼンテーション(トンガ)



だるまの絵付け体験(グループ活動)

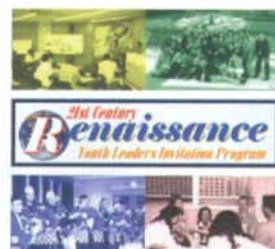


日本文化を外国青年に教える(クラブ活動)



コース・ディスカッションのサマリーフォーラムで模擬国連を実施(国連コース)

## 「更なる国際協調に向けて」 ～出会いから社会貢献活動の実施へ



### I. 事業概要

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業は、昭和34年の当時の皇太子殿下であられた今上陛下の御成婚を記念して開始し、その後40年にわたって実施してきた内閣府の青年国際交流事業を総括するとともに、21世紀のスタートにふさわしい新たな交流事業として2001年から実施している事業です。今年度事業は、平成18年10月5日(木)から10月16日(月)までの12日間で実施され、20か国から各国2名(2コース各1名)が招へいされました。NPOマネジメントコースと社会貢献活動コースに分かれ、4部構成(下記参照)で行われました。

	10月5日(木)	招へい青年来日	
第1部	10月6日(金)	オープニング・プログラム	開会式、パネルディスカッション、歓迎レセプション
第2部	10月7日(土)～ 12日(木)	地方プログラム	NPOマネジメントコース:福島県・宮城県 社会貢献活動コース:長野県・岐阜県
第3部	10月13日(金)～	ヤング・リーダーズ・フォーラム	日本青年を含めてディスカッションを行う
第4部	10月15日(日)	ヤング・リーダーズ・フォーラム まとめ	ヤング・リーダーズ・フォーラムにおける全体のまとめ
	10月16日(月)	招へい青年帰国	

### II. 本年度事業の特徴

本事業の特徴は、参加者及び運営実行委員が主に内閣府青年国際交流事業の既参加青年であることです。事業の運営は、アドバイザー、ファシリテーター、日本人実行委員及び本事業既参加の外国青年実行委員を含む実行委員会を中心に行われ、本年度事業の総合テーマ(次ページ参照)を設定しました。

オープニング・プログラムでは、実行委員がパネリストとなり、参加者の認識を統一するために、実行委員によるパネルディスカッションを導入して、事業主旨と総合テーマを理解してもらうよう試み、地方プログラムでは、1コースが2県を訪問することで、多くの日本の事例に接し、理解を深めてもらうことをねらうなど、本事業最後の実施にふさわしいプログラムとなるよう準備をしました。



▲柴田雅人内閣府政策統括官と全参加青年



▲パネルディスカッションの様子



## 総合テーマ

今世紀ほど、世界にとって国際協調の推進が重要な時はありません。紛争、環境、貧困、高齢化等これまでは一国または限定された地域の問題であったものが、今では国を越えた諸問題へと発展し、対応はますます急がれており、問題解決のために、政府や国際機関に加えて市民による更なる非政府の社会貢献活動が求められています。このような活動では、国際的な共通の価値観や、関係者相互の価値観を尊重する国際協調の精神が大切なのですが、その理解や浸透は、まだ十分ではないようです。

内閣府は、青年のリーダーシップを育成するとともに国際協調の精神を養うことを目的として様々な青年国際交流事業を実施しています。事業終了後は、参加青年が社会活動に取り組むことによって、国内及び国際社会へ貢献することを期待し、ネットワーク強化の支援に力を入れています。既参加青年の事後活動組織は、日本では「日本青年国際交流機構 (IYEO)」が、海外では、「東南アジア青年の船」事業及び「世界青年の船」事業の参加各国において設置されていますし、さらに、IYEOを軸とした国際的事後活動組織も設立され、広大な世界的ネットワークをいかした各種事後活動に取り組んでいます。

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業は、これまでも、事業に参加した青年が行う国際協調の精神に立脚した社会貢献活動の活性化を目的としてきましたが、事業の最終年となる今回は、特に、社会貢献活動を行う基盤として、事後活動組織に焦点をあてることにしました。

具体的には、日本を含む21か国から集まった事後活動組織に所属する参加者が、国際協調についての共通認識を持つことを起点とし、次に、事後活動組織の特色を明確にしつつ、非営利活動団体として実施する、より国際協調を意識した活動の取り組み方と、そのための組織充実に有用な方策の両面から議論し、取りまとめました。最後に、その内容を参加者全員で共有することにより、事後活動組織を基盤とした今後の地域及び国際的な社会貢献活動の充実につなげることにしました。

また、議論を通じ、参加者が視野を広げ、様々な情報を効果的に活用するための知識や、非営利活動団体として社会貢献活動を推進していく実践力と構想力を身に付けることも目指し、総合テーマ「更なる国際協調に向けて～出会いから社会貢献活動の実施へ～」を設定しました。

### III. Our Message

2006年の事業参加者は、日本政府が実施してきた青年国際交流事業の意義を再認識するとともに、「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業の6年間の成果を、内閣府青年国際交流事業既参加者並びに関係者に広くアピールする目的で「Our Message」を作成しました。これは、日本政府が実施した事業の既参加者により構成された事後活動組織が、社会に大きく貢献できる組織として発展することを目指して、今後の方向性と活性化の方策を提案するためのメッセージです。本年度事業「NPOマネジメントコース」メンバーの作成した「NPOマネジメント・ハンドブック」



▲「Our Message」を発表するメッセージ起草委員

及び「社会貢献活動コース」メンバーの作成した「社会貢献活動立案チェック・リスト」と共にまとめました。その構成と中心部分である一部を抜粋して紹介します。

## Our Messageの構成

- 第1節 日本政府が\*SSEAYP、SWY、INDEXを始めた経緯と背景  
 第2節 SI/SWYAAの設立の経緯と憲章にある主旨  
 第3節 事後活動組織育成のための「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業の開始と経緯  
 第4節 2006年「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業のまとめ  
 第5節 今後のAAの方向性

\*SSEAYP：「東南アジア青年の船」事業、SWY：「世界青年の船」事業、INDEX：国際青年育成交流事業、AA：事後活動組織

## 〈Our Message第4節、第5節の抜粋（仮訳）〉

## 抜粋 第4節 2006年「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業のまとめ

第6回事業は、5年間の成果を受けて事後活動組織を活性化するための方策に焦点を当てた。事後活動組織の強みとしては以下の点が挙げられる。1)メンバーは様々な分野で活躍している力を持った人達であること、2)メンバーは世界中に広がっており国際ネットワークを構成する一員としての役割を担う力を持っていること、3)メンバーは政府や地方自治体との繋がりを持ち、協力関係を築くことが可能であること、4)メンバーは自分自身が参加した国際交流事業を通して国際理解と青年活動への理解が深いこと。これらの点を踏まえ、今年度のプログラムの参加者はどのように事後活動組織を運営し、どのような活動に取り組むべきかについて話し合い、まとめられた。

以下は、今年度の具体的な成果をまとめたものである。これらは、今後の活動を実施する際に参考資料としたい。

## 〈NPOマネジメントコース〉

NPOマネジメントコースの目的は、各国のAAが、自分たちの掲げる目的を実現できるように組織の運営面からAAを具体的に支援することであった。特に今年度は、昨年のNPOマネジメントコース参加



▲NPOマネジメントコース(福島県)合宿型ディスカッション・プログラム

者が作成したNPOマネジメント・ハンドブックを更新するという役割があった。

我々のAAには独自性が

ある。なぜなら世界中の重要な役割を担うメンバーが、共通して国際協力と相互理解の展望を抱いているからだ。このメンバーにより築かれた国際的なネットワークは社会の様々なニーズに貢献できる可能性を秘めている。

個々のAAの歴史や経験値は異なり、既に組織がある程度確立している国もあれば、発展段階である国もある。一部のメンバーは、自国のAAを再編するに当たり、将来を見据えた展望を持つ必要があると感じていた。AAを更に強化していくために、この更新されたハンドブックを参考とし、各国でNPOとしての具体的な社会活動を通じて社会に貢献していくことを望んでいる。このハンドブックはAAの歴史や規模にかかわらず、どんなAAでも使用することができる。

コース参加者は、様々な活動や話し合いを通じ経験を共有することによって、AAの強みや課題を認識し、ハンド



▲NPOマネジメントコース(宮城県)(特非)アフタースクールばるけ代表者による講演

ブックを更新していった。さらにこのハンドブックには、AAの現状を把握するAAに特化した事例を



▲ヤング・リーダーズ・フォーラムでまとめの発表をするNPOマネジメントコース

加えることで、各国組織が状況に応じて必要な箇所を使用できるようになっている。

福島県と宮城県での地方プログラムでは、いくつかのNPOの訪問を通じて、コース参加者がNPOマネジメントの様々な側面と方法を目の当たりにすることができた。各国のAAを社会により影響を与えられるNPOとして再生するために、今回のプログラムを通じて関わったNPOの方々と共有した体験、そしてネットワークの構築は有益であった。

〈社会貢献活動コース〉

社会貢献活動コースの目的は、様々な資源を最大限活用

する中で、AAのミッション、ニーズとキャパシティー（団体の持つ能力）を反映する活動を特定



▲社会貢献活動コース地方プログラム（長野県）（特非）スペシャルオリンピック長野・日本代表者による講演後の質疑の様子

することであった。特に今年度はまず我々が最も得意とする主要な要素を発見し、それに従ったプロジェクト・マネジメント・フレームワークを作成し、AAが実際に行える活動を提案することであった。

AAの行う活動が含むべき主要要素：

- 国際ネットワークを活用し、異文化理解を促進するような活動。例えば国際協力活動、プログラムやスタディー

ツアーの支援をする異文化理解教育。

- 青少年分野の知識に長けていることをいかして、ユース・キャンプやボランティア活動など青年の能力を育成する活動。
- AAと影響力を持つ各国政府が共催で、社会により大きな影響を与える青少年国際交流活動。これには日本大使館と共催のジャパン・フェスティバルやAAの発展と更なる社会貢献活動を実現するための人材資源確保、SSEAYP/SWYの選考への関与を含む。

ほとんどのAAは各国で社会貢献活動を行っていた。

しかしこれらの活動は強み、弱み、外部における機会と、さらされている脅威とを総合した戦略分析がされていなかった。以上の点を理由としてAAにとって実用的



▲社会貢献活動コース（岐阜県）（特非）さわやか飛騨代表による活動紹介

な財産となるようなチェックリストとプロジェクト・マネジメント・マップを作成した。

コース参加者は、長野県と岐阜県での地方プログラムで訪れたNPOの行っている社会貢献活動を行う団体訪問を通して多くのことを学び、AAが目指すことのできる活動を明示する上での重要なアイデアを得た。活動例としては、

「より多くの子供を学校へ」、「アチェへの絵本送付」、「エルダリー・アフタヌーン（高齢者のためのプログラム）」などのプロジェクトが含まれる。



▲ヤング・リーダーズ・フォーラムでまとめの発表をする社会貢献活動コース

### 第5節 今後のAAの方向性

「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業は、今年で最後となるが、これは終わりではなく新たな始まりである。本事業で得た知識と経験、築いたネットワークと友好関係をいかして、我々は共に事後活動組織を強化していくべきだ。

個々の事後活動組織が、社会貢献活動に継続的に取り組むことができる団体としてより発展することを目指し、前述の各コースから提案した取組を各組織で推進してもらいたい。また、AAがより大きな影響を世界に与えられるNPOへと発展していくことが望ましい。

これらの活動に取り組むにあたって、「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業で築いたネットワークは、国境と時間を越えたコミュニケーションの促進を図り、互いに協力しアドバイスし合える関係を構築できた。

事後活動組織が政府・民間企業・他のNPOや地域社会などと連携していることは幸運である。従って、各国の地域社会に益が及ぶようにこれらの絆を更に強め、発展していくことを奨励する。

更に、人々が穏やかに仲良く暮らせる成熟した社会を築くためにSIとSWYAA間の連結と国際ネットワーク構築の最大の努力を図るべきである。我々はこのネットワークを最大限に活用し、今後の社会を築くために次世代とグローバル社会の発展に伴う活動を普及させていくべきである。

**我々自身が、国際的な調和を目指す事後活動組織をリードする役割を担うべきであろう!**

## IV. 「21世紀ルネッサンス青年リーダー招へい」事業のこれから

この事業の成果は、外国参加青年が来日している事業実施期間だけでなく、事業終了後のフォローとその事後活動にあります。本事業を通じて、それぞれの事後活動

組織が、組織としての基盤を固め、団体の特徴をいかして社会に広く影響を与える組織として発展し、社会に貢献する活動を行っていくことをねらっています。



▲自国の事後活動組織に持ち帰るために本事業で学んだことを整理する参加青年

本事業の参加青年は、まず、「Our Message」と「NPOマネジメント・ハンドブック」及び「社会貢献活動立案チェック・リスト」を所属する事後活動組織の会員へ紹介し、実践の場で使っていくことが期待されています。IYEOは、「第44回全国推進会議」において、実際に活用しました。(平成18年12月2日現在)

「Our Message」、「NPOマネジメント・ハンドブック」、「社会貢献活動立案チェック・リスト」はこちらで全容を御覧になれます。  
<http://www.iyeo.or.jp/Ren/2006/PPA.htm>

## 第2回「東南アジア青年の船」事業参加青年 田中 治彦さん



## 第2回「東南アジア青年の船」事業に参加されたきっかけを教えてください。

青少年団体の「郵便友の会」から推薦してもらい、大学4年のときに参加しました。当時は、青少年活動を現に行っている青年が参加対象でしたから、個人で応募することはなく、所属団体からの推薦が必要でした。「郵便友の会」とは、手紙を通して世界中の人と友だちになろうという文通を手段とする全国組織の青少年団体でした。私は学校の部活として中学2年のときに入りました。

月に1回ほど集会があって、レクリエーションや討論会、クリスマス会などを通じて交流するのですが、会合に出かけてみると女子校生も来ているんですね。私は男子校に通っていたので、うれしくなってよく参加しました。

実際の海外文通ですが、南アフリカの人と手紙のやり取りをしました。最初は、英語の手紙の文例集をまねて、自己紹介をしたり、学校の話を書いたりするのですが、それだけではだんだん話題がなくなってしまうようになってくるのです。3回くらいやりとりをしたと思いますが、やがて途絶えてしまいました。

「郵便友の会」では、いろいろなテーマ

今回は、立教大学文学部教育学科教授 田中治彦先生の研究室を訪問しました。田中先生は(特活)開発教育協会(DEAR:Development Education Association & Resource Center)の代表理事も務めておられ、2001年には第28回「東南アジア青年の船」事業にアドバイザーとして乗船されました。先生ご自身は第2回「東南アジア青年の船」事業(昭和50年(1975年)度)に参加され、その際に大きな刺激を受けたものの、事業参加直後は、このプログラムの影響で何か新しいことを始めることはなかったとおっしゃいます。しかし、先生がこれまで開発教育にささげてこられた数十年間を振り返ると、やはり、「東南アジア青年の船」事業での体験が原点となっている、とのこと。具体的にどのような影響があったのか、また、開発教育の変遷や新しく出版された教材についてもお話をうかがいました。

でディスカッションをすることもありましたので、大学生になってからは有志助言者というボランティアとして中学生、高校生の研修会の指導にかかわっていました。

## 未知の人たちと出会う旅

私が「東南アジア青年の船」に参加した1975年当時は、日本ではアメリカやヨーロッパへの関心は強かったものの、アジアとの交流はほとんどありませんでした。今でこそ、若い人たちもアジアへどんどん出かけて行きますが、当時は、今とは比較にならないくらいアジアに関する情報が少なかったのです。私はシンガポール人がどんな顔立ちで、イスラムの人々がどんな食事をしているのかすら知りませんでしたし、想像もつきませんでした。

最近、「東南アジア青年の船」事業関係のパーティーに行くと、誰がどの国の人なのか見分けがつかなくなりました。でも、私が参加した1975年当時は、すぐに出身国がわかったものです。例えば、インドネシアの青年は必ずひげをはやしているとか。おそらく今ではどの国の青年も生活レベルが高く、テレビなどの情報も共有していて、

皆が同じような暮らしをしているため、かもしだす雰囲気が出てくるのだと思います。だいたい、どの国でも都会に住んでいる人の生活にはそれほど違いがなく、画一化されていますね。昔は国によって差があり、参加青年の育った環境がかなり違っていたので、それが外見にも表れていたのでしょう。

ですから、当時は、自分には想像もできないような人たちと出会う旅、という感じでしたよ。最初の頃は、みんなとうまくやっていけるのだろうかと思ったほどです。乗船すると、私の同室者はシンガポールの人で、幸いにも私たちは仲良くやっていました。でも、中には、あまりの違いにショックを受けて、自分たちの船室でなんとかやっていけない人たちもいました。彼らは、国ごとに



▲ホームステイにて(フィリピン、バンバンガ、1975年)



同室の友人と  
シンガポール、1975年

荷物を置くために割り当てられていた小さな部屋に10人以上でひしめきあって寝ていたようです。

### 「東南アジア青年の船」での経験が 現在のお仕事とつながっているのですか。

すぐにはつながりませんでしたね。「東南アジア青年の船」事業に参加した後、大学院へ進み、修士論文ではイギリスのユースサービス(青少年事業)について書きました。その後、博士課程で次のテーマを探していました。「国際交流」「青少年」「アジア」などの分野で何かないかと考えていました。「アジア」と言っても範囲が広すぎますし、ある特定の国の教育制度について研究するつもりはありませんでした。「国際交流」も研究テーマとしては扱いにくいように思えました。

### 「開発教育」との出会い

もやもやした気分でも過ごしていたところ、1979年に、国連広報センター、ユニセフ駐日事務所、国連大学による「開発教育シンポジウム」が開催されました。私には「開発教育」という言葉の意味がぴんときませんでしたし、具体的なイメージがわいてこなかったため、このシンポジウムには参加しませんでした。ただ、翌年にその報告書を読む機会がありました。その後、ある方と話していたときに、ふと、この「開発教育」こそ、

自分のライフワークとすべきテーマではないかと感じました。「アジア」「青少年」「国際交流」をカバーし、教育としての南北問題や開発途上国の問題を扱う、これこそ私が求めていたテーマではないかと思ったのです。

博士課程も修了し、現場について知りたいと思って、開発教育研究会に参加するようになりました。そのうちに、日本国際交流センターの伊藤道雄氏より、国際交流センターで働いてみませんかと声をかけていただきました。これからは、日本も国際教育に取り組み、アジアを支援する必要があると伊藤氏はおっしゃいました。私もやはり現場を自分の目で見てみないことには、開発教育の中味を知ることはできないと思い、日本国際交流センターに就職し、アジア各地のNGOをまわるようになりました。フィリピン、インドネシア、バングラデシュ、ネパールなどを訪問し、現地にどんなニーズがあるか調査しました。かつて、私が「東南アジア青年の船」事業で訪れた国々と再びかかわることになったのです。アジアのNGOのリーダーと交流して、私は刺激的で充実した5年間を過ごしました。

1982年に「開発教育協議会」(DEARの最初の名称)が結成され、私もその設立に関与することができました。そして、日本で初めての「開発教育ハンドブック」の制作にもかかわりました。このハンドブックは理論編と実践編に分かれていて、私は実践編の執筆を担当しました。当時は「開発教育」という言葉すらなじみのないものだったから、今後、日本の開発教育につながるような実践例を探し

出してまとめました。例えば、YMCA、国際協力募金、ユネスコの寺子屋運動など、開発教育と銘打ってはいなくても、これからの日本の活動に役立ちそうなものを含めました。

こうして、これまで行ってきた活動と「東南アジア青年の船」事業に参加した経験がDEAR(開発教育協会)の立ち上げに役立ったのです。

### 日本の開発教育の変遷——1980年代

1980年代は、日本では、まだアジアにすら目が向いていない時代でした。ですから、開発教育も、もっとアジアに注目しよう、南北問題に関心を持とう、と訴える段階でした。青年海外協力隊のOBやNGOのスタッフなどが、写真やスライドを見せながら自分の活動事例を語ったり、難民問題、貧困、アジアのスラムなどを見てきた人が、その様子を語ったりする程度で、まだ学校の授業で扱われることは少なかったです。

こうした状況が一変し、開発教育や国際協力が注目されるきっかけになったのが1989年のことでした。

### 日本の開発教育の変遷——1990年代

日本のODA(政府開発援助)額が世界第一位になったのが1989年で、この頃から援助プームが始まり、これに引きずられるような形で、国際化や国際人の育成が叫ばれるようになりました。



▲ダッカのスラムのNGOにて(2006年8月)



▲北タイのストリート・チルドレンのNGOにて(2004年4月)

中学校の社会科の教科書に「シャブラニール=市民による海外協力の会」の活動がコラムのひとつとして取り上げられたり、国語の教科書に地球温暖化や熱帯雨林の話、青年海外協力隊員の活動手記が掲載されたりしたのもこの頃です。

日本の各地には、国際交流協会があって、最初の頃はホームステイなどに力を入れていましたが、国内在住の外国人が増え、また、アジア地域との姉妹都市交流も盛んになったこともあって、開発教育が徐々に注目を集めるようになっていきました。ただ、その頃はまだ手ごろな教材がなかったため、DEAR(開発教育協会)に問い合わせがくるようになり、急に忙しくなってきました。

開発教育の教材がないのはよくないので、イギリスやカナダの教材を探してきて、日本語に訳して使用するようになりました。

#### 参加型的手法

当時としては珍しいことでしたが、開発教育は、参加型ワークショップ形式で行われていました。その頃、一般的に行われていた方法は、熱意に駆られた講演者が、聴衆に向かってたくさんの写真を見せながら一方的に話すというもので、熱く語れば語るほど、聞いているほうは「ひいて」しまうこともあり

ました。見せられる写真の数が多くて、話が終わった後、何を見たのか覚えていない人もいました。自分には関係ない遠い国の話だと思い、ぜんぜん話を聞かない子どももいました。

確かに、開発教育では日本から遠く離れた国の話を扱います。特に、子どもが対象の場合、参加型的手法を用いて、子どもに

とって身近な話題につなげていかなければ、理解してもらうのは難しいことです。それで、話の冒頭に写真を一枚だけ見せて、子どもたちに自分で考えさせるようにしています。「どこの国か」「何をしているところか」など一切教えないで見せます。すると、子どもたちは「おや?」と思って、いろいろ考えはじめます。1時間の授業でたった1枚の写真しか使わないのです。たくさん見せないほうが、子どもたちの想像力がかき立てられ、疑問もたくさん出てきます。これは「フォトランゲージ」と言われる手法です。わずか1枚の写真で子どもたちをひきつけるのです。

「ロールプレイ」という方法もありますね。例えば、ある場所にダムを建設するとします。賛成派と反対派に分かれて、それぞれの役割を演じながら、ダム建設の問題について考えます。

このようにして、開発教育では知識伝達型の教材ではなく、参加型ワークショップ用の教材が広まっていきました。最初の頃は、カナダやイギリスの教材を日本語に翻訳したものを使っていましたが、日本で実践してみると、成功したものとうまくいかなかったものに分かれていきました。

成功したものなかで、いまだにアイス

ブレーキングなどで使われているのが、「部屋の四隅」です。これは、ある質問に対して、「はい」「ときどき」「あまり」「いいえ」という答えを書いた紙を部屋の四隅に張っておき、自分の意見の書かれた隅に参加者が移動するというものです。移動した後に、なぜそう思ったのか、各コーナーの人に意見を聞き、次の質問に移る…という具合に進行させていきます。

この「部屋の四隅」のように生き残った活動が10個ほどあり、90年代後半から、オリジナルの教材が作成できるようになりました。参加型学習の成果と言えるでしょうか。

#### 日本の開発教育の変遷 — 2000年以降

小中学校では平成14年度(2002年)から、高校では平成16年度(2004年)から「総合的な学習の時間」(総合学習)が本格的に実施されています。総合学習では、国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する授業を行うことになりました。総合学習は体験型、参加型の学習を重視するため、「国際理解」の授業の一環として、開発教育が扱う内容を授業で取り上げたいとDEARの教材に関心を持つ先生が増えてきました。

必要に迫られてではありましたが、幸運なことに、私たちはそれまで懸命に参加型の開発教育教材を制作して来ました。世の中がこうした教材を必要とする10年前からすでに手がけていたのです。私たちは学校で授業が行えるように「難民」「識字」「食べ物」「子ども」などのテーマごとに、それぞれ20時間程度で扱えるようなカリキュラムを作りました。これが2001年のことです。25年間、真剣に取り組んできたことが、

ようやくひとつの成果として学校関係者にも認められるようになったのです。

### この教材を作るためにやってきた

「援助」と「国際協力」は開発教育の重要なテーマですが、「援助」というとどうしてもモノや金を贈る「慈善型」の援助をイメージしてしまいがちです。確かに、20年前にはアジアにも目に見える貧困があったため、「モノや金を贈って貧しい人々を助ける」という援助を行った時期もありました。しかし、現在では、例えば、北タイでは住民主導の参加型開発を目指しています。それなのに、日本からやって来るボランティアは、慈善型開発の発想から抜け出せていない人がほとんどで、かえって、現地の人々に迷惑をかけてしまうこともありました。

こうした状況を見ながら、「援助」とは「慈善型」開発だけではないのだということをつかききちんとした教材の形にして残しておきたいと願っていましたが、ようやくその教材が完成したのです。「『援助』する前に考えよう—参加型開発とPLAがわかる本」(開発教育協会発行)です。

この本の主人公「アイ子」さんは、旅行で北タイを訪れ、村の学校を見学してその貧しさに驚きます。帰国して、自分の所属するサークルでバザーをし、その

売上金20万円をこの村に寄付します。その時アイ子さんはこの村を訪れる旅行者に寄付を呼びかける看板を立てます。「あなたの寄付があればもっと子どもたちに教材や道具を買ってあげられます。どうかあなたの10ドルをこの学校のために寄付してください」

さて、あなただったらこの看板を見てどうしますか。また、アイ子さんの活動をどう評価しますか。バザーで集めたお金を貧しい村の学校に贈るといふ誰が見てもよさそうな活動にも、実は、大きな問題が潜んでいるのです。その村が本当に必要としていることは何なのか。援助とは何なのかをとらえなおすことを目的とした教材です。

私はこの教材を作るために25年間を捧げてきたといってもよいのです。この教材を作るために開発教育をやり続けてきたようなものです。貧困、開発、援助とは何なのかを扱ったきちんとした教材を作ることを目標としてこれまでやってきました。25年たって、ようやく日本各地に開発教育の拠点ができ、担い手も育ってきました。今日、念願だったこの本が完成し、当初の目標を達成できたと思っています。

### 最後に青年たちへのメッセージをお願いします。

私は「東南アジア青年の船」事業に参

加したことがきっかけとなって、開発教育の道に進むことになりました。あの船での経験がなければ、このような方向に進んだかどうかわかりま



▲立教大学にて

せん。事業参加直後は、目に見える活動にはつながりませんでした。その後、10年、20年たってから、その経験が生かされてきました。

この冊子の読者のみなさんは、すでに国際交流という分野に関心を持っておられることと思います。関心があるのは素晴らしいことなので、ぜひ、実際に見てきてください。ある国の情報を頭で理解するだけでなく、実際に訪れて、見る経験は貴重なものです。ぜひ、自分の目で見て、友だちをたくさん作ってください。自分の友だちがいる国として具体的にイメージできることが重要です。こうした経験は、皆さんの人生ですぐに役立つことがなくても、いずれ将来必ず何かの助けになります。皆さんの財産になります。どうぞ、直接体験して、そこでできた友人を大切にしてください。

田中先生の25年の研究が凝縮された集大成

国際協力の募金に寄付したあなた・  
海外でボランティアしたいあなた

## 「援助」する前に考えよう

参加型開発とPLAがわかる本

発行：特定非営利活動法人開発教育協会 (DEAR)  
http://www.dear.or.jp/index.html  
価格：本体¥2,400+税



### インタビューを終えて

「今度、こんな本を作ったんですよ」と田中先生が「『援助』する前に考えよう」の本の校正紙の束を見せてくださいました。先生の25年間におよぶさまざまな経験や想いのつまった校正紙の山を眺めながら、自分の頭の中だけにあるイメージを紙上に再現するまでには、いったいどれだけの労力が必要だっただろうと、そのご苦労に思いをはせていました。すると、研究室をノックする音が聞こえ、完成本の搬入が始まりました。先生のご活動の集大成ともいえる「『援助』する前に考えよう」の完成版を真っ先に見せていただき、たいへん名誉なことでした。



## 第4回「青年の船」記念すべき平成18年10月28日



～35周年記念大会開催 & 記念誌発行事後報告～

第4回「青年の船」班長会議事務局  
大沼 弘(4班班長)

吉田秀光大会会長歓迎のあいさつ

### 記念すべき活動その1

平成18年10月28日に鳥取県三朝温泉で35周年記念大会を開催した。

大塚喬清管理官、林部一二団長、松本千代栄副団長はじめ、シンガポールOM (Overseas Member)、家族6名を含む国内外の団員、家族総勢133名が参集した。式典には、片山善博鳥取県知事がご出席くださり、「自立の時代の地域経営」の演題でご講演、大会に華を添えていただいた。懇親会では35年前の「青年」たちが思い出話に花を咲かせ、「青年」全員が肩を組み「青年の船の歌」を斉唱し、宴を閉めた。翌29日の閉会式では、「40周年にまた会いましょう」を合言葉に、次回大会への参加を誓い合った。

### 記念すべき活動その2

平成18年10月28日付で記念誌を発刊した。

神戸港に帰帆してから今日に至るまでの私たち第4回「青年の船」の活動すべてについて、あらためて記録し、整理分析し、報告し、次世代に伝えるべく思いを込め、集大成したものである。団員から寄せられた原稿、コメント等は延べ259人分を数える。早速、子ども・孫を相手に、ページをめくりながら思い出話を聞かせていることであろう。



この2つの活動の起こりは「班長会議」であり、「班長会議」そのものが活動の原動力であった。神戸帰帆後も毎年の開催、5年毎に記念大会の開催と、途切れることなく続いてきた「班長会議」。この継続が「伝説の4回船」と呼ばれる故由である。

そして、班長の背中を見た団員は、班長に追いつき追い越せを目標に、後続する船事業の班長、NL (National Leader) など20名を超える指導者の実現を見た。この「輩出」が「伝説の4回船」と呼ばれる故由である。



もっと楽しく、もっと学べる、もっと出会える国際交流プログラムのために…

## 1. 目的

国際交流事業の企画経験者を対象に、国際交流の目的について考え、事業をコーディネートする上で必要なスキル習得を目指します。特に交流プログラムの企画を小グループで実際に立てる経験を通じ、実践に即したノウハウを体感します。また受講生のネットワークを構築し、研修後の情報交換を図ります。

## 2. 概要

- (1) 開催期間：2007年3月10日(土)～3月11日(日)
- (2) 会場：BumB 東京スポーツ文化館
- (3) 主催：財団法人青少年国際交流推進センター
- (4) 対象者：\*国際交流事業に仕事として携わっている人  
\*これまでにボランティアとして事業の企画経験がある人  
\*対象年齢は概ね25歳～40歳
- (5) 募集人数：約30名(応募者多数の場合は選考)
- (6) 参加費：10,000円(事前振込)(1泊3食・夕食懇親会・受講料・資料代含)  
申込み締切り後、参加決定者に参加決定通知をお送りします。その中に振込口座のご案内を同封させていただきますので、指定日までにお振込願います。
- (7) 応募締切：2007年2月20日(消印有効) 郵送、FAXまたは電子メール(添付ファイル)にてお送りください。
- (8) プログラム内容：



### ◆基調講演 「国際交流における異文化コミュニケーション」

講師：榎本智子助教授(神田外語大学国際コミュニケーション学科)

ニューメキシコ大学コミュニケーション学部博士課程(Intercultural Communication専門)卒業。

専門分野はコミュニケーション論、異文化間コミュニケーション。多文化のスタッフがいる企業で働く中で、異文化コミュニケーションに関心を持ちその研究の道へ進む。現在の研究テーマは価値観の文化間伝播。趣味はキャンピング。在米中はテントを担いでグランドキャニオンにも出かけるほどのアウトドア派。

#### 〈主たる著書〉

- \* (共著) 「対人関係構築のためのコミュニケーション入門-日本語教師のために」ひつじ書房(2006)
- \* 国際行動学会編「文化摩擦における戸惑い」第1部アメリカ合衆国での体験「ニューメキシコでの時間との遭遇」創元社(2004)
- \* 西田ひろ子編「異文化間コミュニケーション入門」第二章「非言語」創元社(2000)

講師：ジョン・C・コンドン博士(ニューメキシコ大学理事教授)

コンドン博士はニューメキシコ大学コミュニケーション・ジャーナリズム学科の教授であり、当大学で一番名誉ある「理事教授」の資格を付与されている。40年にもわたる教育歴の半分はアメリカ以外のアジア、アフリカやラテン・アメリカで過ごしている。国際基督教大学では10年教育に携わる経験ももつ。「異文化間コミュニケーション」の先駆者として活躍。建築デザインに興味を持ち、実際に自宅のデザインをする。趣味の料理はプロ並み。

#### 〈主たる著書〉

- \* 「異文化間コミュニケーション～カルチャーギャップの理解」近藤千恵訳、サイマル出版会(1980)
- \* 「言葉の世界 コミュニケーション入門」齊藤美津子訳、横山紘子訳、サイマル出版会(1972)

◆分科会テーマ

A. プロトコール・安全管理	国際交流事業を実施する上での守るべきルールやマナー、また事業中の安全管理について考えます。
B. 企画立案(含広報活動)	国際交流事業を企画する上でのポイント、また効果的なPR方法について考えます。
C. ファシリテーション	実行委員会の運営や、事業中のグループワーク等に役立つ「チームの力を引き出すファシリテーション」スキルについて考えます。
D. 異文化コミュニケーション	国際交流事業での異文化コミュニケーションの重要性について考えます。

	午 前	午 後	夜 間
3月10日 (土)	<p>受付(09:45予定) 開講式 オリエンテーション 基調講演 「国際交流における 異文化コミュニケーション」</p>	<p>分科会 *分科会A～Dに分かれ、それぞれ専門的なスキルを習得します。</p>	<p>グループ活動1 *各分科会に参加したメンバーが、グループ1～4を結成し、「国際交流プログラム」を企画します。</p>
3月11日 (日)	<p>分科会フォローアップ *昨夜のグループ活動を振り返り、問題点等の解決策を分科会に戻って再確認します。 グループ活動2 *再度グループに戻り、「国際交流プログラム案」を企画します。</p>	<p>グループ発表 *グループ活動の成果発表を行います。 振り返り *研修全体を振り返り、気づきや学びについて整理します。 終了(15:00予定)</p>	

(9) 申し込み・問い合わせ先：応募用紙郵送ご希望の方は下記までご連絡ください。

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-35-14 東京海苔会館6階  
 (財)青少年国際交流推進センター 「国際交流リーダー養成セミナー」担当 椿・大橋  
 TEL：03-3249-0767 FAX：03-3639-2436  
 e-mail:seminar@iyeo.or.jp  
 \* 要綱および参加申込書は(財)青少年国際交流推進センターの  
 HP (<http://www.centerye.org>) から様式をダウンロードできます。

## 第14回「青年の船」30周年記念同窓会実行委員募集

### 第14回「青年の船」第3班 雨宮 美津子

第14回生のみなさんお元気ですか。

早いもので第14回「青年の船」は今年25周年を迎えました。

3班では25周年を記念してミニ同窓会を8月に八丈島で行いました。班員の一人、佐藤恵さんのご主人(佐藤正明さん-13班)が昨年八丈島に転勤されたのを機に、8月5日~7日の2泊3日で行って来ました。参加者は、子供ひとりを含めた6人と、佐藤一家の計9人です。関西組は伊丹から出発して関東組と羽田で合流し、45分のフライトで八丈島に到着しました。空港では佐藤一家が私たちを出迎え、感激の再会を果たしました。

天候に恵まれ、佐藤さんの案内で美しい八丈富士や三原山、温泉、光るきのご探検ツアー、海水浴等と八丈島の自然を満喫しました。また、黒潮に採まれた新鮮な魚介類のネタの島寿司を始めとする島料理、明日葉入りのうどん、そば、ソフトクリーム、島焼酎...どれもおいしいものばかりでした。そして、

5年後の30周年には、第14回「青年の船」メンバー全員が集えるような、ビッグな記念大会を関西で行いたいと思っています。関西方面の方を始め、一緒に企画して下さる実行委員の方を本誌で募集します。メールだけでの企画参加も可能ですので、下記アドレスにご連絡下さい。お待ちしております。

[m-amemiya@mvc.biglobe.ne.jp](mailto:m-amemiya@mvc.biglobe.ne.jp)

第14回「青年の船」第3班 雨宮美津子

八丈島と言えば「くさや(秘伝の漬け汁に漬けた魚の干物)」ですが、これは一名以外はやはり食べられませんでした。

また、黄八丈織のお土産も大変すてきでした。

夜は、ロッジで25年前の懐かしい昔話で盛り上がりました。話の種にされ、くしゃみをした方も大勢おられたのではないのでしょうか?

青年の船での出会いから25年経った今も強いきずなで結ばれ、これからも今までと同じように友情を育てていくことができると確認できた楽しさ満載の同窓会でした。(八丈島での写真です。さすがに25年経ちましたね)



### 平成18年度内閣府青年国際交流事業(航空機による青年海外派遣)報告会

#### 伝える和、広がる輪

日時：2007年2月18日(日)13:30~17:00(13:00受付開始)(予定)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟国際会議室

参加費：無料

〈主催〉

内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

(財)青少年国際交流推進センター

日本青年国際交流機構(IYEO)

〈アクセス〉

小田急線「参宮橋」駅下車 徒歩約7分

東京メトロ千代田線「代々木公園」駅下車 徒歩約10分

〈本件に関する連絡先〉

(財)青少年国際交流推進センター

内閣府青年国際交流事業(航空機による青年海外派遣)報告会

担当：赤澤、川嶋、壬生、桑原

TEL：03-3249-0767 FAX：03-3639-2436

[airreport@iyeo.or.jp](mailto:airreport@iyeo.or.jp) HP <http://www.iyeo.or.jp/Air/2006>



### 第33回「東南アジア青年の船」事業報告会

日時：2007年3月18日(日)13:00-16:30

(受付12:30~)(予定)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
カルチャー棟小ホール

参加費：無料

〈主催〉

内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

(財)青少年国際交流推進センター

日本青年国際交流機構(IYEO)

〈アクセス〉

小田急線「参宮橋」駅下車徒歩約7分

東京メトロ千代田線「代々木公園」駅下車徒歩約10分

〈お問合せ先〉

(財)青少年国際交流推進センター(担当：白鳥、田畑)

Tel：03-3249-0767 Fax：03-3639-2436

E-mail：[sseaypreport@iyeo.or.jp](mailto:sseaypreport@iyeo.or.jp)

URL：<http://www.iyeo.or.jp/sseayp/report2006/>

## 「ターニングポイントⅡ」が完成しました!

昨年発行された「ターニングポイント」の続編が完成しました。内閣府(総理府・総務庁)の国際交流事業に参加したことが人生のターニングポイントになった既参加青年に直接お話をうかがい、事業参加後の活躍ぶりをたどっています。

頒布価格は1冊1,000円です。送料は1冊80円、10冊以上の場合は無料です(1箇所のみ)ご希望の方は、送料を加えた代金を以下の口座にお振込みください。入金が確認され次第、発送します。

郵便振替口座番号:00140-3-73972 加入者名:日本青年国際交流機構

### 「ターニングポイントⅡ」に ご登場いただいた方々(敬称略)

酒井 洋幸(第9回「青年海外派遣」)  
菊地 喜正(短期第5回「青年海外派遣」)  
坂田 清一(第11回「青年の船」)  
豊岡 正仁・陽子(第12回「青年の船」)  
尾身 伝吉(第12回「青年の船」)

伊豆 美沙子(第1回「世界青年の船」)  
坂西 佳子(第2回「世界青年の船」)  
池上 清子(第1回「東南アジア青年の船」)  
亞洲奈 みづほ(第21回「東南アジア青年の船」)



### 「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA) インターナショナル・リユニオン(フィジー開催)中止のお知らせ

マクロコズム11月号(P.21)でご紹介した平成19年2月18日~22日の日程でフィジーにて予定していたインターナショナル・リユニオンですが、第19回「世界青年の船」事業でのフィジーとトンガでの訪問国活動が中止となったことに伴い、開催を中止する運びとなりました。詳細につきましては、「世界青年の船」事後活動組織のホームページ([www.swyaa.or.jp](http://www.swyaa.or.jp))と日本青年国際交流機構(IYEO)([www.iyeo.or.jp](http://www.iyeo.or.jp))のホームページをご確認下さい。



#### 今月号の表紙

グローバル・フォト・コンテスト入賞作品

「モン族プティックの屋下がり」

(白鳥 正信、日本、SSEAYP 20)



(ベトナム北部山岳地帯 サバにて)

#### 編集後記

マクロコズムの編集担当となって2度目の新年を迎えました。「ターニングポイント」にご登場いただく方、各都道府県IYEOでの特色あるイベント等の情報を今年も募集しています。(ふ)

#### MACROCOSM 1月号 Vol.74

2007年1月22日発行(隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町  
2-35-14 東京海苔会館6階

TEL:03-3249-0767 FAX:03-3639-2436

e-mail: [macrocosm@iyeo.or.jp](mailto:macrocosm@iyeo.or.jp)

URL: <http://www.centerye.org> (CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)


編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構(IYEO)

定価 240円(本体229円)

印刷所 株式会社 長正社

TEL:03-3531-1369 FAX:03-3531-3235

A close-up portrait of a man with dark hair, smiling broadly. He is wearing a light-colored suit jacket, a white dress shirt, and a dark tie. The background is softly blurred with warm, bokeh lights.

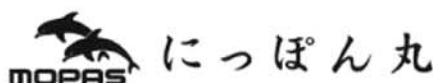
パパとママを労わるように、  
お客さまにも心を尽くして。

にっぽん丸 ホテルサービスクルー ジョセル・デマスウアイ

since  
**1884**  
Pioneer Of  
Cruise



「クルーズイヤー2006」  
の公式スポンサーとして  
クルーズを盛りあげる  
イベント・キャンペーン  
に協賛しています。



遡ること14年前、一人のフィリピン人青年がにっぽん丸に乗り込んだ。彼こそフィリピンクルーの最古参ジョセル・デマ  
スワイこと「ジョジョ」である。「初めのころは仕事もつらい、言葉もよく分からない。毎日ホームシックでした…。そ  
んな彼の心の支えとなったもの、それはお客さまから頂戴した温かな言葉。「いろんなお客さまが、ワタシに優しく声を  
かけてくれました。ありがとうとか、頑張るとか、みんな自分のパパとママのように優しくった。だからホームシック  
もなくなりました」。そんな彼も、このにっぽん丸で年を重ね今や41歳。多くのフィリピンクルーの指揮をとるチームリ  
ーダーとなった。「これからはワタシの番だと思っています。自分のパパやママを優しくするように、いろんなお客さま  
にも優しくしたい。この14年間、ワタシを育ててくれたのはにっぽん丸のお客さま。だからそれは思返しなのです」と  
言っにはかむジョジョ。感謝と優しさに満ちた心を持つ彼は、まさに日本人以上に日本の心をもったナイスガイだった。



## もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅

### oasis にっぽん丸

横浜→(伊豆諸島周遊)→横浜

2007年3月9日(金)~3月11日(日)

98,800円

### 春の巻・宿毛クルーズ **神戸発着**

神戸→巻岐→宿毛→神戸

2007年3月17日(土)~3月20日(火)

132,000円

### アクティブクルーズ 前途悠遊

横浜→神津島→横浜

2007年4月25日(水)~4月27日(金)

88,000円

### 小笠原スプリングクルーズ

横浜→父島→横浜

2007年3月11日(日)~3月16日(金)

210,000円

### 春の松山・屋久島クルーズ **博多発着**

博多→松山→屋久島→博多

2007年3月21日(水・祝)~3月24日(土)

120,000円

### 2008年世界一周クルーズ **横浜・神戸発着**

横浜・神戸発着(各101日間)海外17カ国24港

2008年4月7日(月)~7月17日(木)

2,980,000円

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。



**商船三井客船**

MOPASは商船三井客船の愛称です。〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三井ビル5F

お問い合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。

クルーズデスクフリーダイヤル

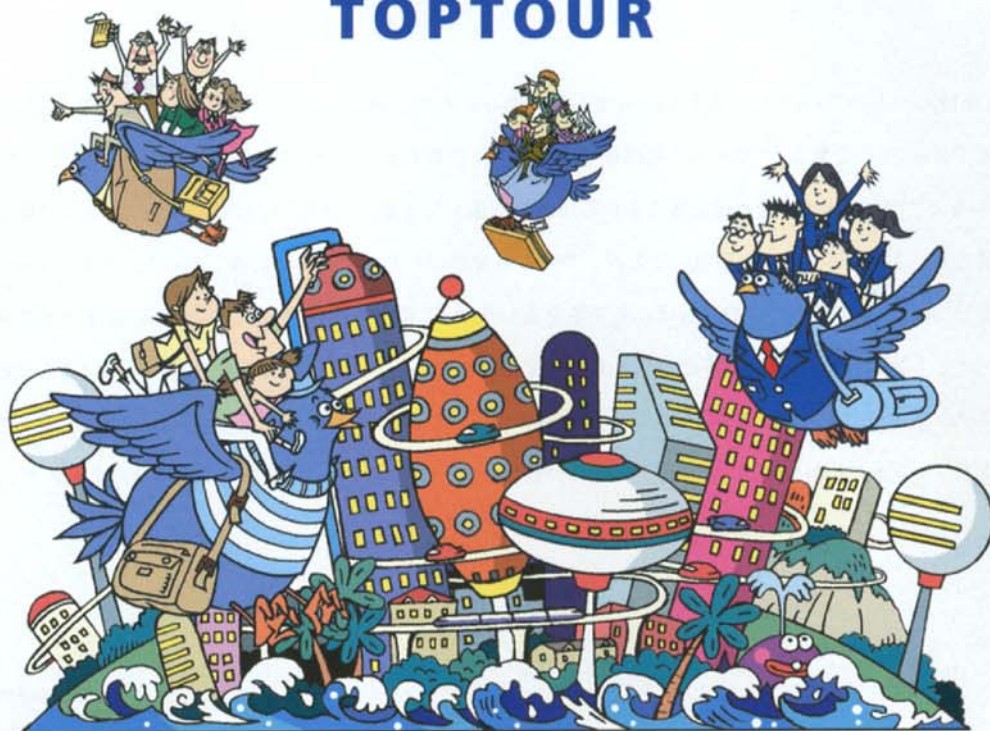
☎0120-791-211 <http://www.mopas.co.jp>

The 50th Anniversary

2006年1月31日



TOPTOUR



東急観光株式会社は創立50周年を機にトップツアー株式会社として生まれ変わりました。

旅は人と人とのコミュニケーションの架け橋

旅は人と自然が触れ合う地球の扉

旅は人と歴史をつなぐ時空間のトンネル

そんな旅を創造し、提案する[旅行インテリジェンス企業]

それがトップツアー株式会社

東急観光は50年にわたる第一幕からトップツアーとして新たな第二幕のステージに立ちました。

みなさまから愛される企業をめざして……

人が行き、人が集う、それが旅。

マクロコスム

2007年1月号

通巻七四号隔月発行

定価二四〇円(本体二二九円)

編集協力

内閣府政策統括官  
(共生社会政策担当)  
日本青年国際交流機構



東急観光が社名を変えました。

トップツアー株式会社

国土交通大臣登録旅行業第38号 ©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員  
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目9番1号 <http://www.toptour.co.jp> <http://toptour.jp>